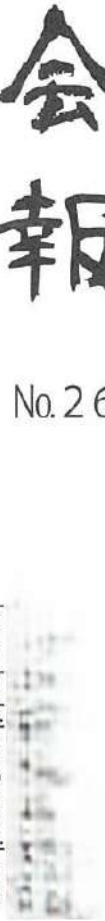
宮古郷土史研究会
会報
No.266
編集 発行 宮古郷土史研究会
kyoudoshiken@gmail.com



<1月定例会レジメ>

宮古諸島に見られる石積み遺構の構築技術についての一考察

山本　正昭

はじめに

琉球列島における本格的に石積みの構築は十三世紀後半ごろと考えられており、沖縄本島では首里城や今帰仁グスク、中城グスクなどの大規模なグスクにおいて切石を築石として面を組み合わせて高さ一〇メートル前後の石積みを築き上げるまで、石積みの技術は深化した。

加えて宮古諸島においても十三世紀以降から石積みが構築されるようになるが、それは高さ二メートル前後の自然石を組み上げた野面積みで、沖縄本島に見る石積みと比較すると石積みの技術の格差が際立っている。

本報告では宮古諸島に見られる十四～十五世紀段階の石積みとされる遺構についての概略を触れていき、その石積み技術の実態について触れていくと共に、その構築された背景についても考察していきたい。

1．石積みの機能時期

宮古島における石積みを有する遺跡は箕島遺跡（写真1）、オイオキ原遺跡（写真2）や新里村西遺跡、砂川元島遺跡、友利元島遺跡、久場嘉城跡などに見ることができるが発掘調査されている事例は極めて限られる。更に石積み遺構の構築時期についても過去の発掘調査においては明らかにはなっておらず、その構築年代については遺跡の発掘調査による出土遺物からの年代でのみ推察する以外に無いのが現状である。

写真1

写真2

これらのことから石積みを有する遺跡は概ね十三～十五世紀の龍泉窯系や中国産褐釉陶器が出土していることから、当該時期に石積みが導入され、展開されていったものと見ることができる。

2．石積みの特徴

宮古島における十三～十五世紀と見られる石積み遺構を観察すると、自然石または粗く割って加工した石材、粗割石に限られており、面側を平滑に加工した切石を現在のところ確認することはできない。このように丁寧に加工された石材が見られないことに合わせて、石積みの高さも二メートルを超えることは稀有である。それは自然石、粗割石では面側の合端の噛み合わせが切石のそれに比べても弱いことに起因しているものと考えることができる。

また、これらの石積みは裏込石を伴っていることから、ある程度までの高さにまで築かれている。更に平場の際に相当する位置に構築することで、より内部への侵入を困難とする障壁としての機能を有していると言える。

3．石積み構築技術の伝播

宮古島における石積みの構築技術については沖縄本島との関係性を考えることができる。沖縄本島中部に所在する大湾アガリヌウガン遺跡では遅くても十三世紀後半には石積みが築かれており、丘陵上における防御的な施設としての機能を有している。

また、沖縄本島の本部半島に所在するシイナグスクでも十三世紀後半から十四世紀前半にかけて構築されたと考えられる石積み遺構が確認されている。

両遺跡共に自然石や粗割石を用いており、裏込石を伴う石積みで、その高さは一・五メートルを越えない極めて小規模な石積みであると言える。

以上の特徴から、構造的に宮古島に見られる石積みとの共通性が見られると共に、その機能についても同様であると指摘できる。

よってどちらの地域が先行しているかは、現状では断定できないが、ほぼ同時期に両地域において石積みが多用されていったものと見ることができる。

4．構築背景について

沖縄本島では十四世紀以降に高さ二メートルを超える石積みは切石を多用してくる事例が多くみられる。石積みの高層化は防御性を高めると同時に高度な縄張りとの連携の中で機能していくことになる。一方で宮古諸島では自然石や粗割石で組み上げられた野面積みが主体であることからか、複雑な縄張りを有している遺跡は見ることができない。

その背景としては争いの規模が小さいことや石積みを構築する技術者の数や労働力の動員に限界があると言える。このように大規模な土木事業を実施できる状況にまで至っていないことが、現在残る石積み遺構の姿からうかがうことができる。

また、石材加工に必須の石工具の確保にも限界があったものと見ることができる。それは石工具の使用が石材加工の精粗の差に現れ出ることから考えると、当時における宮古島の石積み用材から石工具の普及はあまり見られなかったとも言うことができる。

【参考文献は文字数の関係で割愛】